

ただキリストと共に歩む

水戸無教會

第3号

編集 半田梅雄

マラナ・ター（主よ来たりませ）

石原秀志

マラナ・ター（コリント前書
一六・二二）

口語訳聖書にそのまゝ記されて
いる此の僅か二語よりなる短かい
言葉は、初代教會のキリスト者達
の間に用いられた挨拶の言葉であつ
たと考へられてゐる。

我々の周囲では最も盛んに用いら
れる挨拶は季節や天候のことである。
日本のように四季の移り変りがはつき
りして居り、然も自然の変動の激しい
風土にあつては、人々の関心が強く
之等の事に向けられるのも致し方ない
事であつた。

併し初代のキリスト者にあつては、
此の様な自然の時とその遷移への関
心よりも遙

に勝つて歴史の時とその遷移に對する
関心の方が重要な意味をもつていた。
それはキリスト者にとつては第二の時を
意味する。所で時が歴史のうちで眞に
時となつたのはイエス・キリストが神
の子として我等の間に來り給うたその
日に始る。而して第一の「時」の到來
したことを知る事を許された者は更に
此の來るべき時、新しい時を待望の
うちにもつ。迫害と苦難との唯中に
福音信仰を貫こうとする初代キリス
ト者達にとつては、此の第二の時に対
する希望と期待とが強くあつたことは
当然としなければならぬ。

イエスが世に來り給うた時の御言は「神の国は近づけり、汝等悔改めて福音を信ぜよ」であつたが、今やパウロ達の時代は「我等の主の再び來り給う時は近づいた。汝等福音に確く立つて待望め」と言う激励の時であつた。「時の徴」を我等は明らかに知る事は出来ない。然し唯一つ明らかな事は、來りつゝある第二の時に向かつて我々が一步々歩みつゝあると言ふ事である。

その故に主イエス・キリストを着て、光の中を歩む事こそ我々の全存在をかけた信仰の告白でありたいと願う。

時また期は父おのれの權威のうち
に置き給へば、汝らの知るべきに
あらず。されど聖靈なんぢらの上
に臨むとき、汝ら能力をうけん
(使徒行伝一・七八)

石原兵永先生講演筆記

生けるキリストの信仰

特別に新しいことではなく、聖書の中から、皆さんと共通の問題即ち、人は如何に生くべきか」と言う根本問題について、共に学びつつ話してみたいと思う。人間としては甚だ弱いものであるが、神の力に支えられて、瘦がまんでなく、本当のことを学びたいと思う。キリスト教の本質は、佛教やマホメット教などのいわゆる一般的宗教とは違うということである。キリスト教による神は、我々人間が生きて働いているように、何時も生きて全世界を支配し給う神である。マルコ伝一二章二四節―二七節にあるよう

にアブラハム、イサク、ヤコブの神である。アブラハムにも生き、イサク、ヤコブにも生々と働きかけ給いし神、今の私たちにも生きて働きかけ給う神である。イエスに問いかけた学者のように、観念的な神にしてはいけない。私たちの内にも生きて在り給う神を眞実の心をもって仰ぎみなければこのことはわからない。まことに神は、全宇宙を創造し、支配し、批判し、裁き且守り導き給う神である。しかもイエス・キリストによって示された神は、父なる神である。義なる神であると共に

愛の意思をもって、我々の魂に働きかける神である。何もにも煩わされることなく、絶対なる意志をもって働きかけ給う神である。

「わが父は今にいたるまで働き給ふ、我もまた働くなり」(ヨハネ伝五ノ一七)とイエスは申された。永遠の世界の始めより、宇宙を支配し、今に至るまで働き給う父なる神、善を行い、不義を憎み、貧しき者、弱き者を援け、一人一人に生命を与え、働かせ給うところの神、この生ける神よ、り生命を与えられて我々も始めて働くことが出来る。聖書をよく読んで下さい。このように生きた力を与えないものは本當の信仰とは云えない。

ルカ伝一五章に有名な放蕩息子のたとえ話がある。自分勝手な考えから父の元を飛び

出して散々に放蕩をし盡し、遂には豚の餌までとつて食べたい程に落ちぶれた息子、ここに神と人間との関係が実によく語り盡されているように思う。これは二千年前の人に語られた一ぺんの寓話ではない。神に逆つて行詰まった人間のどうにもならない姿がここにはある。然し父なる神はこの放蕩息子を棄てられなかった。走つて行つてその頸を抱いて接吻し全家をあげてよろこびの宴を張り給うのである。神様は本當に私たちを抱いて下さる。神と人間との関係は人格と人格との接觸である。生ける者と、生ける者との関係である。(未完)

半田記

病者もまた働くなり

松本文助

私は病院の事務を執っているので病人に接する機会が多いが、結核病棟の患者の病床の生活をおもうと絶えられない感じがする。痛み、不快さ、そして経済問題、家庭問題、社会問題それからそれへと色々なやみが荒波の如く打ち寄せる。その苦痛はヨブのろいの如くなるであろうと思うのである。(ヨブ記三章)。斯る病者の苦痛そのものゝような人生に、はたして意義があるのであろうかと、深く考えさせられるのであった。

然し或る教友の姉妹が入院されたので、私は聖書研究を

始めた。姉妹は横臥したまま五年近くもただ熱心に聴くだけであつたが、この間私にとつては実に大きな信仰的な収穫があつて、神様の深謀に驚いたのであつた。

聖書知識誌第二〇五号の巻頭言「ポスト」の記事が自分の実験となつた。「何も伝道をなさらなくなつたつて皆様がああして東京の真中で何年も本当の福音にしっかりと立つていて下さることが立派な伝道ですわ」「しっかりと立つにも程がありますよ。十年も二十年もただ立っているだけなら町角のポストと同じだ」「ポストだつて結構ですわ郵便物を

お配りするんですもの」「――」

何一つ出来なくともただ熱心にその救を求めんとするときに福音の「お配り」の役目をはたすことが出来ることに気が付いたのであつた。

塚本先生の丸の内集会廿五周年を迎えたことも聖書知識三百号の出版を見たことも、全くその救を求めんとする者があつてのその果実ではあるまいか。

イエスがマルタの家に迎えられるとき、マルタはイエスに対する饗応に心いりみだれるほど働キイエスをよろこばせんとしたが、妹のマリアはイエスの足下に座して御言を聴きいつていた。マルタはたまりかねてイエスにマリヤを手伝わしめるようにお願いした。ところがイエスは自分の

為に心勞し働くマルタよりも、ただだまつて聴き入つていたマリヤを非常におほめになつた。「マリヤは善きかたを選びたり此は彼より奪うべからざるものなり」と(ルカ一〇の三八―四二)

病める兄弟姉妹達よ。何たる歓岳、何たる福音であるう。イエスはただだまつて御言を聴き入つている者を扞び給うのである。そうしてイエスは神様の御心にたゞ従順に十字架の苦杯を受けた。そのことよつて有史以来実に比類なき大事業を為したのである。

神様は無為と思わるるような病者に却て偉大なる働きを為さしめんとするのである。

荒野についての序論(二)

石原秀志

イスラエルは厳しき現実としての荒野にあつて理想としての乳と蜜との流るゝ沃野を絶えず目がけつゝその歴史を歩んで来た。一度は沃野を獲得したかの如くであつたが、然し尚それは理想の地には遠いものであつた。新しき沃野を目がけての歩みは依然として続けられねばならなかつた。そしてそのイスラエルを導き給うものこそ昼は雲の柱、夜は火の柱をもつて先立ち往き給う主なる全能の神であつた(出エジプト一三章)。

彼こそ、そして彼のみが単なる自然を通してではなく、歴史の中に、歴史を貫いて我等に顕れ、我等を導き給う唯一の神であり給うのである。

荒野は神がイスラエルの民を特別に召し出し、訓練し給う場であつた。モーセに率いられた四十年は、かくてイスラエルの国民的出発とそれに続く形成の為の時であつた。かくして漸く約束の地に臨む事を得たイスラエルは、今や沃野の生産と文化とを戦い取るべく努めたが、遂にその対決に敗れたのであつた。敗北、亡国、絶望—イスラエルの前途は再び荒野の死の蔭の谷と變つたのである。

イスラエルの荒野の彷徨は決して四十年を以て終らなかつた。捕囚時代はイスラエルがその歴史において最も深く荒野を味つた時であつた。そして荒野が厳しければ厳し

い程、約束の地に対する思慕は深からざるを得ない。「バビロン河のほとりに座りシオンを思い出でて」は涙を禁ずる事が出来なかつたのである(詩一三七)。然し、此の厳しい彷徨の中に、ピスガの嶺より約束の地を望見し得たモーセの如くに、イスラエルは一つの新しい沃野を遠望する場に迄到達する事を許された。

既に早くホセアが予言した如く、此の荒野の中の「アコルの谷」は新しきイスラエルの「望の門」となり、荒野より新しく葡萄園に導かれたのである(ホセア二・一四・一五)。かくてバビロンの捕囚の民の歎きの中にあつて預言者は慰めて曰く、「汝ら野にてエホバの途をそなえ、砂漠に我等の神の大路を直くせよ」と。(イザヤ四〇・三)

今や一切の傲慢と不信と背徳とを捨てて新しく神の民として立上がり、荒野の唯中にヤーウエの歩み給う路を備へるべき時であつた。それはすでに憂国の預言者エレミヤが亡国の兆歴然たる時に輝しい希望を告白した新しい契約の預言(エレミヤ三一・三一一三四)に生きる事であつた。かくてイスラエルは一度忘れ果てようとした神の民という名を更に深い意義を以て再び己のものとなし得たのであつた。木曾の詩人杉山義次は「神あらば敗北なしと誰か云う敗北してぞ神を知るなり」と歌つたが、まことにイスラエルは敗北と亡国の荒野に於てイスラエルの神が生きて在し給う事を新しく知つたのである。(未完)

讚美歌のあゆみ (一)

半田信子

明治九年には、四六七番の
讚美歌も

奥野正綱、植村正久、松山高
吉の諸氏である。

(つづく)

明治七年には実に八種の歌
集が発行されている。殊に邦
人の創作歌が多数を占めてい
た事、教派心なくよく一致協
力した事はその詩集、翻訳が
稚拙であったとは言え、全世
界のプロテスタント教会に希
にみるすぐれた各派共用讚美
歌集を生み出す母胎となつた
事は見逃してはならない。

“もろびとこぞりて”(現讚
美歌八八番)と推定せられる
ものも“世界よ岳こべな主が
が来るぞ あゝ天地と万物は
その主をみよ”という調子で
ある。また比較的良く訳され
現在にまでその形を残してい
るものもある。

明治二十一年までの間には
三十有余の讚美歌集が刊行さ
れたが何れも此の七年に出来
たものを中心とし改訂増補し
たもので漸次新訳の紹介もあ
り或は歌詞がととのえられた
ものである。明治七年に活躍
した日本人には奥野昌綱、熊
野雄七、本多庸一、が居る。

“ちとせのいわよ”(二六二番)
われたるいわやわれをかこめな
さきたるわきの みづ又ちしお
つみもなやみもきよくあらえよ

“エスにまざる名は”(五〇八番)
エスの名にまざる てんにちにもな
し
神のおんめぐみを 世界にあらわし
われらエスのまえ うたうをこのむ
この名天にも地にも いやましとう
とむ

一 エス我を愛す 聖書にぞ示す
彼強ければ 我おそれじな
あゝエス愛す あゝエス愛す
ああエス愛す 聖書に示す

となり讚美歌翻訳の改訂進度
を示している。当時は未だ開
拓時代で宣教師は教派的布教
法をさけ信徒も又教派的觀念
が極めて希薄であつたが、そ
の後教派的に明確に分離する
様になつてからは、他教派出
版の歌集を参考し、それから
採用することはあつても教派
間に直接協力編纂したものは
全くなかつた。

明治十九年共通讚美歌編纂
の協調がなされたが挫折し、
一致、組合両派のみの努力で
新撰讚美歌が生れた。中心に
なつて編纂に当たつた人は、

“夏期聖書講習会”

今夏七月十日前後、太田市
西山文化研修所に於て、夏期
聖書講習会を開く予定です。

講師には黒崎幸吉先生が、
北海道へ行かれる途次お寄り
下さる予定です、くわしい
ことは次号でお知らせ致しま
す。

日曜集会

毎日曜日午前十一時より

水戸市東原町水戸幼稚園

ガラテヤ書研究 半田

ヨブ記研究 大森

参加自由、但しヨブ記研究は
午後昼食を共にした後です。

朝 礼

小 貫 武 壽

私の所でも愈々集会を持てるようになった。かつて、病

氣中、松本さんその他の信者の方が来られて集会を持った頃には、家の中に全然キリスト教を理解する者もなく、変な目で見られながら気まずい思いをしてやって居つたものであつた。一時は店の忙しい時期にやつた為、父親から怒鳴られて了つたこともあつた。

それが今、毎週定期的に日曜日の夜、店員の一部ではあるが集まって研究会を持てる様になつたのは、確かに進歩であり、感謝である。勿論まだ生まれた許りで之が何処まで

で続くかは私にはわからないけれども……。

併し信者だけの集まりも確かに有益ではあるが、未信者が福音に耳を傾けてくれる集りは、非常に為になるのではないかと思つている。

既に種は播かれた。たゞ問題は播いた種が育つかどうかと云うことである。が併し之は心配する必要がない様に思う。この会が続くか続かないかは神のみ知り給うのであるから、實際此の会が生まれたのも強いて作つたものではなく、求めて願つていゝうちに自然に出来てきたものである。

『神の国は、或人、たねを地に播くが如し、日夜起臥するほどに、種生え出でて、育てども、その故を知らず、地はおのづから実を結ぶものにして、初には苗、つぎに穂、ついに穂の中に充ち足れる穀なる。実みのれば直ちに鎌を入る、收穫時の到れるなり』

(マルコ四・26-29)

『われら神の国を何にならずへ、如何なる譬をもて示さん。一粒の芥種のごとし、地に播く時は萬の種よりも小けれど、既に播きて生え出づれば、萬の野菜よりは大きく、かつ大なる枝を出して、空の鳥、その蔭に棲み得るほどになるなり。』(マルコ四・30-32)

伝道は人がやる様であつて人ではない。神の大きいなる力が人を動かしてその事業を為すのであると私は思える様になつた。

『我等この宝を土の器に有り、これ優れて大いなる能力の我等より出でずして神より出づることの顯れんためなり』(コリント後書四・七)とパウロは告白している。

私も同じ様に自分自身の駄目なのに此の頃つくづく絶望し、神の奴隷で結構だから上からの命に従つて生きようと思つたのである。

であるから私に、自分の様な神経の細い、臆病でお人好しの人間であつても、憶せず思い切つて集会の先達を引受けたいのである。

神よ願わくは、私達の小さな集まりを育て給え、そして御名を顯し給え。私達の総ての事業を通して多くの人に御国を知らしめ給え。

祈り

(三)

大森孝夫

イエスは朝、まだ暗きうちに起きいでて、寂しきところで祈られました。山に行き祈りつつ夜を明かし給うたこともありません。ただ一人で祈られたばかりでなく、人々と共にも祈り給いました。イエスの奇蹟は、イエスが目をあげ、天を仰ぎ祈り給えることによつて父なる神から与えられたのであり、イエスの際だった重大事の裏には必ず神の御前にひざまずき、ひたすら力を求め給うところの「祈り」があつたのであります。しかししてイエスは非常な危機の時ばかりでなく事ある毎に祈られ、その祈りの際におい

ては全身全霊をあげ給うたのであります。かのヘルモン山上の「祈り」の際には御顔は日の如く輝き、御衣は光の如く白くなられたのであります。またゲッセマネの「祈り」の際には血の汗を流されながらあつき「祈り」を捧げ給うたのであります。さらば「祈りの人」イエス・キリストの「祈り」を貫く根本精神はなんでありましょうか。藤井武先生はマルコ伝一四章三六節の聖句「アバ父よ、父には能はぬ事なし、この酒杯を我より取り去り給へ、されど我が意のままを成さんとあらず、御意のままを成し給

へ。」および、ヨハネ伝一二章二七―二八節の聖句、「今わが心騒ぐ、我なにを言ふべきか、父よ、この時より我を救ひ給へ。されど、我この為に、この時に到れり。父よ、御名の栄光をあらはし給へ。」の中にイエスの「祈り」の根本精神が表われておると述べております。正に然りであり、私たちはこゝに「祈り」の模範を見ることができるのであります。イエスの「祈り」の全てに通うものはただ「神の御栄の現われんことを、神の聖意の成らんことを」願うことであり、「そのためならば如何ようなりとも聖旨のまゝになし給え」という御心でありまして、これこそイエスの「祈り」の根本精神であつたばかりでなく、その生涯の根本的態度でもあつたのでありま

す。ひるがえつて、信仰薄き私の「祈り」には自分のための願望をきゝ入れ給えと求めることがしばしば多いのであります。また私に与えられた酒杯のいと苦きによりて、これより離れしめ給えと祈り求めることが極めて多いのであります。しかし、ここに私たちはイエス・キリストによつて眞の「祈り」のなんたるかを学び得たのであります。我が内村鑑三先生はイエス伝を学ぶことによつて、「ゲッセマネの苦禱」と言う一文を草しその結尾において次の如く述べておるのであります。「『聖意をして成らしめ給へ、全地に於て、我ら自身に於て』・・・信者に実に是れ以外の祈りがあつてはならない。ゲッセマネは信者の生涯

の縮図であつてまた其頂点である。」

然り、正に然り、「たゞイエスと共に歩む」眞のキリスト者たるものは、一切を神に委ね自己の肉の願は成らずとも「聖意を成らしめ給へ」と神のために神に祈るのであります。そしてたとえ、祈ること能わざる時にもかく祈らしめ給へと全身全霊をさゝげて祈るのであります。「神の求め給ふ供物は砕けたる靈魂なり」(詩篇五八・一七)まことに「砕けたる靈魂」より発せられる「祈り」こそ「神の御旨にかない、神の聴き入れ給う眞の祈り」であり、神に絶対従順たるこの「祈り」によつてこそ人生最大の力と平安とが与えられるのであらうと、私は今回の学びによつて

深く深く信じ得たのであります。

後記

四月一日水戸市医師会館講堂に石原兵永先生をお迎えした。演題は「生けるキリストの信仰」その内容については、お許しを得たので別掲を始めてとして四回位に連載する予定である。当夜は糠雨もよい、都市計画進行中の悪路を犯して参会者は会場に満ちた。準備した椅子が、過不足なくぴつたりだったのは偶然とは云え、何か磊しかった。極めて静粛にそして熱心に、人々は先生の一語一語に耳を傾けていた。講演が終つてから、或る婦人は「私一人の為に話をして下さつたよう

に思えた」と感激を洩らしていた。併しこのことはこの婦人ばかりでなく、大部分の人々の共通の感動であつたように思う。私自身もそうであつた。先生を通して神の恩恵が、キリストの御手が水戸市をしつかり抱きかゝえて下さつたように思う。本当に感謝である。先生はつるやに宿泊され、翌日帰京された。駅にお見送りした時、なつかしい兄に対するような惜別を覺えた。

新緑の五月、さんさんと降りそゞぐ陽光の下、あちこちに鯉のぼりが日本の子供らの夢と希望をはらんでゆうゆうと、天空をおよぐ。

今は自然のすべてに育ちゆくものゝ美しさ逞しさがみなぎり溢れている。殊に松の鉢芽立ちの美しさは、何とも形

容し難いものがある。いぶし銀色に光るその芽は村松海岸などの黒松の若木が特に素晴らしい。あの一途に眞直に天に指向う芽立ちに生命の神秘が底知れぬ力に支えられているように思う。信仰生活にもいろいろ理屈はあり、辯解もあろうが、まずペトラ(岩)に根をしつかりと張つてすくすくと伸びることだ。雨や風は年がら年中我々を憂鬱にとちこめて置くわけではない。

(半田)

昭和三十年五月 発行
水戸無教会第三号
実費 十円 千共
編集兼印刷人 半田 梅雄
発行人 松本 文助
発行所 水戸市東原町四六四二
水戸幼稚園内
水戸無教会